

## 「帝国の慰安婦」が問いかけるもの (下)

### 加害者としての日本の帝国主義が日本社会に共有される認識を

中沢けい

夏目漱石がロンドン留学を命じられたのは1900年(明治33年)のことだ。翌年1月にロンドンに到着早々の漱石はビクトリア女王の葬列をロンドンの群衆に混じって見送っている。63年と7カ月の長きに渡ってイギリスに君臨したこの女王の像は現在でもバッキンガム宮殿の入り口で大勢の観光客を集めている。ビクトリア女王在位時代に大英帝国の領土は10倍に増えたと言う。世界各地を植民地もしくは半植民地化した大英帝国の繁栄を象徴する女王の葬列を、ロンドン到着早々の漱石は見送ったことになる。日本が大韓帝国を併合し、朝鮮半島を植民地としたのは、ビクトリア女王の死から9年後の1910年のことだ。19世紀の帝国主義の時代が終わりを告げる第1次世界大戦勃発の4年前になる。ビクトリア女王の葬列に並んだ欧州の王侯たちが植民地を巻き込んで争った最初の戦争だ。日本は帝国主義の時代が終わろうとする頃に植民地経営に乗り出したわけだ。

### 帝国主義に関する日本の世論形成は成熟していない

韓国の作家やジャーナリストから「帝国主義についてどう考えるか」「植民地を作ったことについてどう考えるか」という質問を受けた日本の文学者が「戦争はよくない」と答える場面に何度か出会っている。韓国側はあくまで「帝国主義」「植民地主義」についての現在の考えを問いただしているにもかかわらず日本側は「戦争」について答えてしまうという食い違いは、そのまま日本国内の一般的な世論を反映している。

被害を意識的に語りついできた戦争は、日本社会に共通の理解を生み出してきたが、戦争に至る帝国主義、植民地主義について言えば、明治の世の輝かしい日本のイメージが語られることのほうが多い。大日本帝国の輝かしき頃として語られる植民地主義、帝国主義は「遅れてきた帝国主義者」の側面をまったくそぎ落としてしまう。日中戦争から太平洋戦争に至る戦争が植民地主義の破たんであったことから目をそらせてしまう。帝国主義、植民地主義に関する日本国内の一般的な世論形成はまだ十分には成熟していない。

「帝国の慰安婦」の著者の朴裕河氏が刑事で起訴された名誉毀損事件の公判が、この1月から始まった。朴裕河氏はこの裁判で、「陪審員」がつく「国民参与裁判」を申請した。韓国の司法では一般の国民が「陪審員」として参加する裁判形式を選ぶことができる。

韓国人として自国に対する厳しい見方にたつ「帝国の慰安婦」だが、植民地差別と女性差別の両方の側面から従軍慰安婦問題を考えるべきだという指摘は、日本のとってたいへ

ん厳しいものであることは前回、述べたとおりだ。日本社会の世論形成が未成熟な部分を突いている。また、従軍慰安婦問題を過度に単純化したイメージに収れんさせるべきではないというこの本の主張は、慰安婦問題の存在そのものを認めようとしなない右派の主張と混同される場合があることも前回述べた。SNSなどで断片化した情報では、右派の歴史修正主義者に対する批判と見間違えるような言葉が流れてくることも前回、指摘した。昨年、12月28日にあまりにも唐突な慰安婦問題妥結が日韓両政府によって発表されたことも、朴裕河氏への非難に拍車をかけている。朴裕河氏の著書は右派に利用されているという声も聞く。右派を利するための本だとの単純化が、そこでは起きている。

### 「春婦伝」で描かれた「同志的關係」は憐憫の情の別名

とりわけ、田村泰次郎の小説「春婦伝」から日本軍兵士と慰安所の女性の中に「同志的關係」があったとする記述は大きな非難の的となり、慰安婦被害者の名誉を毀損するものとされている。兵士と慰安婦の中に「同志的關係」があるという主張が、被害と加害の関係を無化してしまうものであるかのように受け止められている。虚構の作品をもって慰安婦問題の解決のヒントがあるとした点にも非難は集中している。

しかし、ここで田村泰次郎の作品をもとに語られていることは、社会制度の裏側で、個人がひっそりと自分自身の精神を救うための情操が文学的な抒情を生み出している事象である。帝国主義国家の支配の下での被害と加害の関係を崩すようなものではない。死刑囚と看守の間にも人間的な友愛が目覚めることがある。それと同じことが戦場で起きていたが虚構の作品をもとに論じられているのだ。人間の感情には、自分自身の救うための心の働きが隠されている。この心の働きは根源的なものだ。虚構をもってしか描きえない心の働きである。文学作品は、言葉を伝達の記号として扱うのではなく、人間の感情を背景（シチュエーション）の中に置き、そこに結晶する形（フォルム）を造形する材料として言葉を扱う。それが虚構を仕組むということだ。

「春婦伝」に描かれた兵士と慰安婦の間の「同志的關係」は、言い換えれば個人と個人の間には生じえない憐憫の情の別名だと言える。憐憫の情は人間精神が根源的に持っている心の働きである。人と人をお互いの無限の闘争から救い出すためには、この憐憫の情が動かなければならない。しかし、人間の感情に宿る根源的な心の働きである憐憫の情は、社会制度の中では押しつぶされてしまうことが多い。憐憫の情はかぼそく、かよわい。社会の中では色あせ見失われることが多い。世間の目に晒されるとたんに無残に崩れ去る。まことに頼りなく無力なものなのだ。しかし、根源的な心の働きとしての憐憫の情は人間の精神を救うためには絶対に必要な創造（イマジネーション）である。これなしには、人と人は永遠に闘争の世界に投げ込まれる。

## 憐憫の情を語ることを刑事事件にすることへの疑問

このような事柄を語ることがなぜ刑事事件とされなければならないのか。そこにあるのは、人のこころの中に密かに浮かぶ憐憫の情を萎えさせ、しなびさせ、枯らしてしまう世間の目であり、個人の存在ではない。社会正義の名のもとに、人間の自然なこころの働きを惨殺してきたかつての全体主義への反省とは正反対の精神を私はそこに感じる。

従軍慰安婦被害を否定しようとする人々が朴裕河氏の著作を、悪用することには断固として抗議する。ましてや、従軍慰安婦問題は日本と韓国との闘争としてのみ捉えようとする人々が朴裕河氏の著作を自己の主張に都合良く利用しようとするなど言語道断と言える。

また被害を訴える社会運動に不利に働くからという理由で朴裕河氏の著作を排除しようとする人々にも断固として抗議する。人間はひとり、ひとり、孤独な魂の世界を持っているのだ。孤独な魂の世界で起きる精神のドラマを踏みにじることは誰にも許されない。

朴裕河氏が「同志的關係」ということばで発見した憐憫の情の動きが、従軍慰安婦問題の政治的解決の糸口になるためには、加害者としての日本の帝国主義、植民地主義がより多くの議論の中で多角的に検討され、日本社会に共有される認識が醸成されなければならない。